仙台市文化財調査報告書第 399 集

長町駅東遺跡第12次調査

―仙台市あすと長町 28 街区・店舗建築工事に伴う発掘調査報告書―

2012 年 3 月

仙台市教育委員会
株式会社エスエープランニング

仙台市文化財調査報告書第 399 集

長町駅東遺跡第12次調査

—仙台市あすと長町 28 街区・店舗建築工事に伴う発掘調査報告書—

2012 年 3 月

仙台市教育委員会
株式会社エスエープランニング

序　　文

仙台市の文化財保護につきまして、日頃から多大なご協力を賜り、まことに感謝にたえません。

市内には、旧石器時代から近世に至るまで数多くの埋蔵文化財が残されております。当教育委員会といたしましても、先人たちが残してきた貴重な文化遺産を保護し、活用を図りながら市民の宝として、次の世代に引き継いでいくことは、これからの「まちづくり」に欠かせない大切なことであると考えております。

本報告書は、多賀城造営以前の陸奥国府と考えられ、国の史跡指定を受けた「仙台郡山官衙遺跡群　郡山官衙遺跡　郡山廃寺」の西側で都市整備が進められている「仙台市あすと長町土地区画整理事業」地内で実施された長町駅東遺跡第12次発掘調査の成果をまとめたものです。

区画整理事業に伴う発掘調査は平成10年から開始され、古墳時代後期から奈良時代としては、東北地方でも最大級の集落が事業地内にあったことが明らかになり、郡山遺跡に営まれた官衙との関係が考えられております。ここに報告する調査成果が地域の歴史を解き明かしていくための貴重な資料となり、広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助になれば幸いです。

また、発掘調査及び調査報告書の刊行に際しまして、特に事業者である株式会社エスエープランニング様には調査の重要性をご理解いただいた上で、ご協力いただきました。

最後になりましたが、昨年3月11日の東日本大震災では、仙台市内も大きな被害を受けております。震災から1年を経て、仙台市では震災からの復興に向け、「ともに、前へ仙台　～3・11からの再生～」を掲げて、復興計画を進めているところです。そうした中、発掘調査及び調査報告書の刊行に際しまして、多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げ、刊行の序といたします。

平成24年3月

仙台市教育委員会
教育長　青沼一民

例　言

1．本書は、仙台市あすと長町 28 街区・店舗建築工事に伴う長町駅東遺跡第 12 次調査の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、仙台市教育委員会が株式会社シン技術コンサルへ委託して実施した。
3．本書の作成は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課　工藤信一郎、水野一夫の監理の下、遺物整理から本書の編集に至るまでの作業を株式会社シン技術コンサル　小川長導が担当した。
4．本書の執筆・図版作成は、第１章１を工藤、第１章２～６章を小川が担当した。
5．陶磁器の年代・産地の確認は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課　佐藤 洋の協力を得た。
6．調査及び報告書の作成にあたり、株式会社エスエープランニングよりご協力を賜った。記して、感謝の意を表す次第である。
7．調査・整理に関する全ての資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡　例

1．第１図・第２図の地形図は、それぞれ国土地理院発行「仙台」1/25,000、「長町」1/10 ,000 を使用した。
2．図中の座標値は、日本測地系「平面直角座標第Ｘ系」を基準としている。図中及び本文記載の方位北は、全て座標北を基準としている。
3．断面図中の数値は、海抜高度（Ｔ．Ｐ.）を示す。
4．本文中の土色の記述には、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄　2005）を使用した。
5．調査において検出された溝跡は、長町駅東遺跡第 11 次調査（環状線西調査・平成 20 年）の延長部分と考えられるため、当時の遺構番号をそのまま使用した。
6．遺構図の縮尺は、平面図は 1/120、断面図は 1/60 を基本とし、その縮尺で掲載が困難なものについては、適宜縮尺を変えている。各図にはそれぞれのスケールを付した。
7．出土遺物の登録には、以下の遺物略号を使用し、遺物ごとに番号を付した。
　C：土師器（非ロクロ調整）　E：須恵器　I：陶器・瓦質土器　J：磁器　K：石器
8．遺物実測図の縮尺は、挿図・写真図版ともに 1/3 で統一した。
9．遺物実測図において、外形線・中心線・稜線は実線、推定線は破線で、釉薬の境は一点鎖線で表示した。中心線が一点鎖線のものは、図上復元したものである。
10．土器実測図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。

　黒色処理　　炭化物範囲

11．遺構観察表及び遺物観察表中の（　）内数値は残存値を示す。

目　次

序　文
例　言
凡　例

第１章　調査に至る経過 …… 1
　１．調査事由 …… 1
　２．調査要項 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
　１．長町駅東遺跡の立地と地形 …… 2
　２．周辺の遺跡と歴史的環境 …… 2

第３章　調査の方法と概要 …… 4

第４章　基本土層 …… 5

第５章　検出遺構と出土遺物 …… 6
　１．SD268 溝跡 …… 6
　２．出土遺物について …… 14

第６章　まとめ …… 16

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　長町駅東遺跡及び周辺の遺跡位置図 …… 3
第２図　調査区位置図 …… 4
第３図　基本土層 …… 5
第４図　遺構配置図 …… 7
第５図　1・2トレンチ　SD268 溝跡平・断面図 … 8
第６図　5・6トレンチ　SD268 溝跡平・断面図 … 9
第７図　SD268A 期溝跡出土遺物（1）…… 10
第８図　SD268A 期溝跡出土遺物（2）…… 11
第９図　SD268A・C 期溝跡、カクラン出土遺物 … 12
第10図　カクラン出土遺物 …… 13

第１章　調査に至る経過

１．調査事由

長町駅東遺跡は、仙台市南部の太白区長町地区に計画された「仙台市あすと長町土地区画整理事業」の施行に伴い実施された確認調査により所在が明らかになった遺跡である。

区画整理事業の施行に伴う発掘調査は、長町駅東遺跡・西台畑遺跡及び郡山遺跡の一部を対象として、平成10年から現在まで継続して発掘調査が行われ、7世紀中頃から8世紀始めの時期を中心とする竪穴住居跡が総数500軒近く発見されている。

また、郡山遺跡では、昭和54年以来継続して発掘調査が行われ、陸奥国府である多賀城に先行する2時期の官衙（Ⅰ期官衙→Ⅱ期官衙）があったことが明らかになっている。

長町駅東遺跡の調査は、平成13年から事業計画地内の道路計画地を対象に調査が開始され、今回の調査で第12次調査となる。そのうち第8次調査と今回の第12次調査は区画整理事業に伴う調査ではなく、街区内に計画された建築計画に伴い調査を実施している。長町駅東遺跡の調査では、これまでに300軒近い竪穴住居跡が発見されているが、特に第3・4次調査（平成15・16年）では、集落の北部を区画している施設と考えられる材木列1列、一本柱列4列、通路状遺構を伴う大溝跡が確認され、区画施設の変遷が明らかになっている。

今回の長町駅東遺跡第12次調査は、あすと長町事業地内28街区において株式会社エスエープランニングにより計画された店舗建築に伴い、仙台市教育委員会に事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出されたことに始まる。開発地は長町駅東遺跡の北西部にあたり、平成20年に街区南側の環状線を対象として行われた第11次調査区に隣接した場所である。また、平成19年に実施した遺構確認調査では、今回対象となった28街区西半部からは、国鉄時代のカクランの影響は受けているものの遺構確認面や河川跡等が確認されていた。

そこで、発掘調査の実施が必要であると判断されたことから、教育委員会と事業者の協議の結果、計画された建物部分を対象に発掘調査を実施することになった。

２．調査要項

遺 跡 名：長町駅東遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ―317）
所 在 地：仙台市あすと長町土地区画整理事業地内28街区5・6・7・8・9画地
調査期間：2011年（平成23年）10月11日～2011年（平成23年）11月21日
調査主体：仙台市教育委員会
調査担当：仙台市教育委員会文化財課調査指導係　主任工藤信一郎　主事水野一夫
調査組織：株式会社シン技術コンサル
　　調　査　員　　小川　長導
　　調査補助員　　相澤　正信
調査面積：1,641㎡
整理期間：2011年（平成23年）11月22日～2012年（平成24年）3月16日

第２章　遺跡の位置と環境

１．長町駅東遺跡の立地と地形

長町駅東遺跡は仙台市南東部の太白区長町六丁目付近に所在する（第１図）。仙台市南部の副都心整備事業である「仙台市あすと長町土地区画整理事業」の施行に伴い、平成３年から４年に実施された確認調査で所在が明らかになった遺跡である。その範囲は南北 480 m、東西 200 mの 90,000㎡に及ぶ。遺跡の南東約 2.5 km の地点で合流する広瀬川と名取川の間に拡がる郡山低地に位置し、標高 10m 前後の自然堤防と後背湿地上に立地している。

２．周辺の遺跡と歴史的環境

郡山低地周辺地域には、旧石器時代から近代にかけての遺跡が数多く分布している。今回の調査では、近世から近代にかけての遺構・遺物が検出されていることから、長町駅東遺跡の主要な遺構が検出されている古代から近代にかけての周辺遺跡について概観する。なお、周辺の遺跡と歴史的環境の詳細については、仙台市文化財調査報告書第 315 集「長町駅東遺跡第４次調査」（2007）を参照していただきたい。

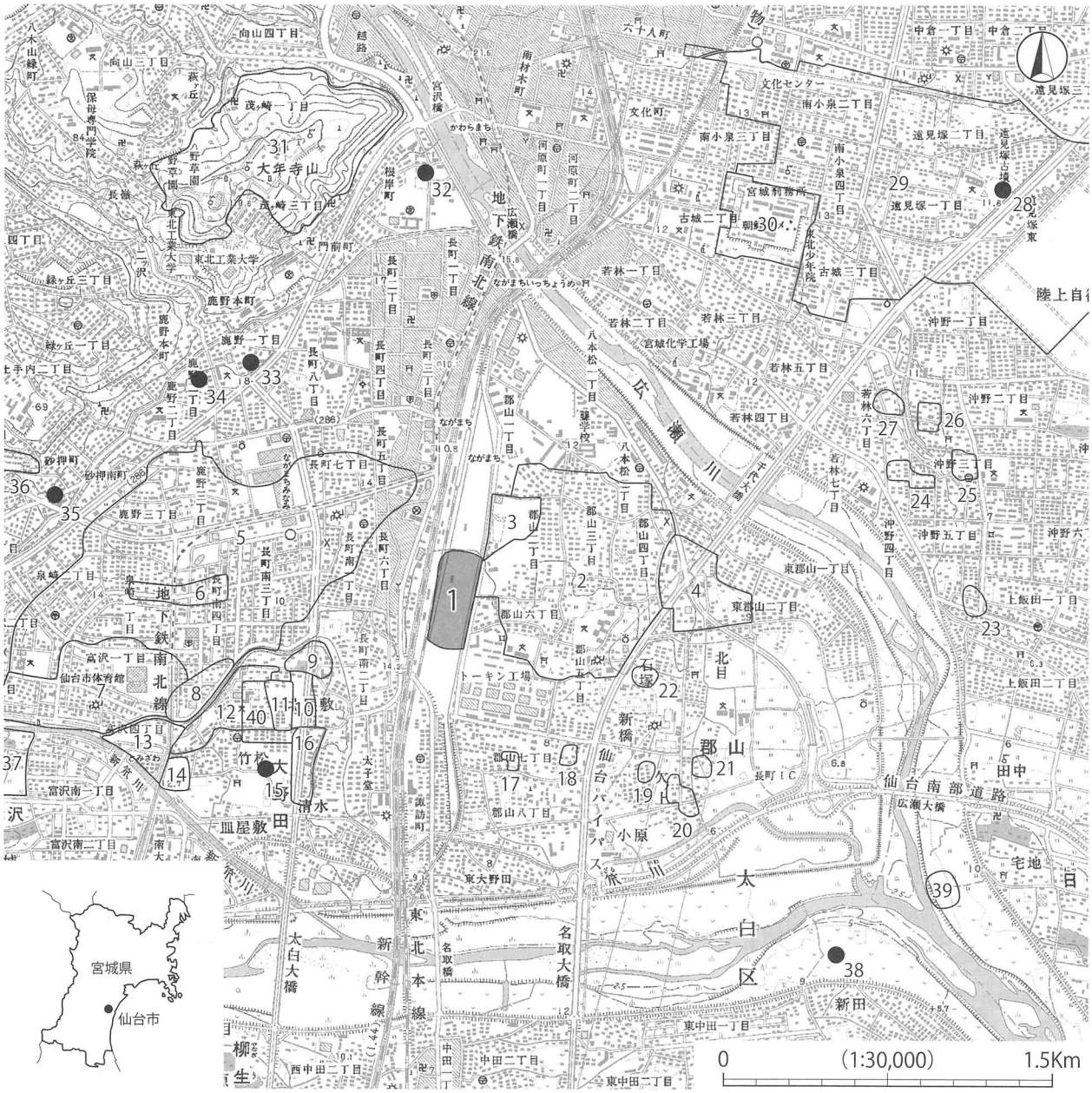
長町駅東遺跡（１）の東側には、平成 18 年７月に「仙台郡山官衙遺跡群　郡山官衙遺跡　郡山廃寺跡」として国史跡の指定を受けた郡山遺跡（２）が隣接し、北東側には集落跡である西台畑遺跡（３）が隣接している。

郡山遺跡は７世紀中頃から８世紀前葉にかけての官衙であり、「Ⅰ期官衙」と「Ⅱ期官衙」の２時期の変遷が確認されている。Ⅰ期官衙は７世紀中頃から７世紀末葉にかけて造られた古代陸奥国の建国に関った重要な柵跡で、Ⅱ期官衙は多賀城創建以前の陸奥国府跡と考えられている。Ⅱ期官衙の南には郡山廃寺が併設されている。西台畑遺跡と長町駅東遺跡は、出土土器の年代幅などから、郡山遺跡における官衙の造営・運営に関連する集落跡と考えられている。長町駅東遺跡では、これまでに 300 軒以上の竪穴住居跡が検出されている。集落の北側では官衙成立以前に一本柱列による区画施設が造られ、官衙期に通路状遺構を伴う大溝跡と材木列による区画施設に造り替えが行われている。また、集落の南側では旧河道による地形に沿って材木列が造られている。郡山遺跡の南西約 1.5 ㎞にある大野田官衙遺跡（40）では、真北方向を軸とする掘立柱建物跡６棟と建物群を区画する大溝が検出されている。出土土器の年代幅や建物配置などから、郡山遺跡Ⅱ期官衙に関連する官衙跡と考えられている。

中世になると、交通の要衝に大規模な屋敷や城館が造られるようになる。王ノ壇遺跡（16）では、堀に囲まれた武士層の屋敷跡や阿弥陀堂と推定される仏堂跡が検出されている。この他、波板状遺構と側溝を伴う路幅 2.8 ～ 4.2 mの道路跡が検出され、中世の基幹道路である奥大道と推定されている。南小泉遺跡（29）では、大規模な堀と土塁を伴う城館跡を中心として、周辺に方形の屋敷を構えた中世村落の景観が復元されている。北目城跡（４）は、戦国時代に仙台市南東部から名取市北部にかけて勢力を奮った粟野大膳の居城で、関ヶ原の合戦の際に伊達政宗が入城し、仙台城の完成まで居住したとされている。

近世になると、奥州街道沿いに位置する長町は、宿駅として機能していたことが知られている。『名取郡北方根岸村・平岡村入会絵図』にみられる長町宿の景観は、街道の両側に屋敷を計画的に配置し、宿駅全体を囲うかたちで居久根が見受けられる。若林城跡（30）は、土塁と幅約 20 mの堀で囲まれた平城で、伊達政宗が晩年を過ごしたとされる。南小泉遺跡では、若林城下町の武家屋敷跡と考えられる遺構が検出されている。

明治時代になると、東北本線の開通に伴い、明治 29 年に長町駅が営業を開始する。その後、大正 11 年に駅舎の改築と同時に操車場の建設が開始され、大正 13 年に長町操車場として開業した。



国土地理院発行 数値地図 1/25,000「仙台」を使用

No.	遺跡名	種　別	立　地	時　代	No.	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	長町駅東遺跡	官衙関連・集落跡	自然堤防・後背湿地	縄文～中世	21	欠ノ上Ⅲ遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安
2	郡山遺跡	官衙跡・寺院跡	自然堤防・後背湿地	縄文～中世	22	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
3	西台畑遺跡	官衙関連・集落跡	自然堤防	縄文～中世	23	河原越遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安
4	北目城跡	城館・集落跡	自然堤防	縄文～近世	24	砂押Ⅱ遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安
5	富沢遺跡	集落跡・水田跡	後背湿地	旧石器～近世	25	中柵西遺跡	包含地	自然堤防	弥生～平安
6	泉崎浦遺跡	包含地	自然堤防	縄文・奈良・平安	26	神柵遺跡	包含地	自然堤防	縄文～平安
7	山口遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	縄文・弥生・奈良・平安	27	砂押Ⅰ遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安
8	下ノ内浦遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安	28	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
9	元袋遺跡	集落跡	自然堤防	奈良・平安	29	南小泉遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	弥生～中世
10	大野田遺跡	墓域	自然堤防	縄文・弥生	30	若林城跡	城館	自然堤防	中世・近世
11	袋前遺跡	集落跡・官衙	自然堤防	縄文～平安	31	茂ヶ崎城跡	城館	丘陵	中世
12	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安	32	兜塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
13	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安	33	一塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
14	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安	34	二塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
15	鳥居塚古墳	古墳	自然堤防	古墳	35	砂押古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
16	王ノ壇遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防・後背湿地	縄文～中世	36	土手内横穴群	横穴古墳・窯跡	丘陵斜面	古墳
17	的場遺跡	集落跡	自然堤防	奈良・平安	37	富沢館跡	城館	自然堤防	中世
18	篭ノ瀬遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安	38	大塚山古墳	円墳	自然堤防	古墳
19	欠ノ上Ⅰ遺跡	水田跡	自然堤防	平安・中世	39	日辺遺跡	集落跡	河川敷	古墳
20	欠ノ上Ⅱ遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安	40	大野田官衙遺跡	官衙関連	自然堤防	古墳～奈良

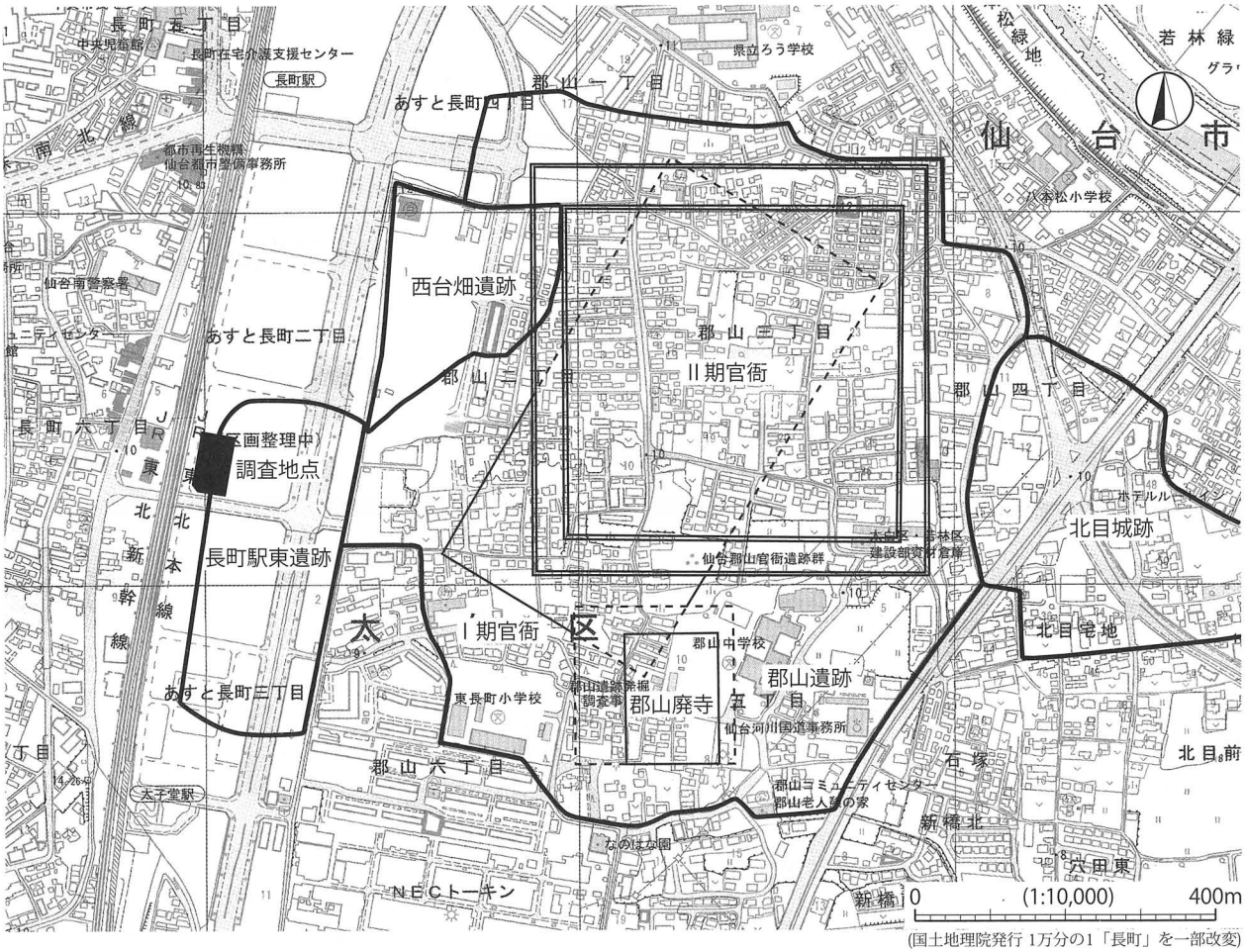
第１図　長町駅東遺跡及び周辺の遺跡位置図

第３章　調査の方法と概要

今回の調査地点は、JR 東北本線長町駅の南約 500 mに位置し、平成 20 年度調査の長町駅東遺跡第 11 次調査（環状線西調査区）の北側に隣接している（第２図）。調査区の現況は更地であり、草刈作業から作業を開始した。また、調査区の南側と西側は道路に、北側と東側は工事区域に面しており、フェンスによる安全柵の設置作業を行った。

表土除去にあたっては、排土を場内処理するため、当初の計画では調査区を便宜的に南北に２分して調査を実施する予定であった。重機（バックホウ 0.7㎥）を使用し、調査区南側から掘削を開始したところ、国鉄時代のカクランにより古代の遺構確認面が壊されていることが確認された。そのため、調査区の全容を把握するためのトレンチ調査に調査方法を変更した。調査区南側にトレンチを３ヶ所（１～３トレンチ）設定して調査を行い、１・２トレンチでは、環状線西調査区で検出された SD268 溝跡の延長と考えられる溝跡が検出された。その後、トレンチの埋め戻しと排土の移動を行い、調査区北側の掘削を開始した。調査区北側もカクランにより古代の遺構確認面が壊されていたため、トレンチを３ヶ所（４～６トレンチ）設定して調査を行った。その結果、５・６トレンチでは、調査区南側同様に溝跡が検出された。

調査の記録は、遺構図面作成についてはトータルステーションによる器械実測を基本とするが、作業の迅速化を図るために、土層図の作成はデジタルカメラによる写真実測を併用した。写真記録については 35㎜モノクロネガ・同カラーリバーサルの２種類のフィルムカメラによる撮影を基本とし、補足としてデジタルカメラによる撮影を実施した。



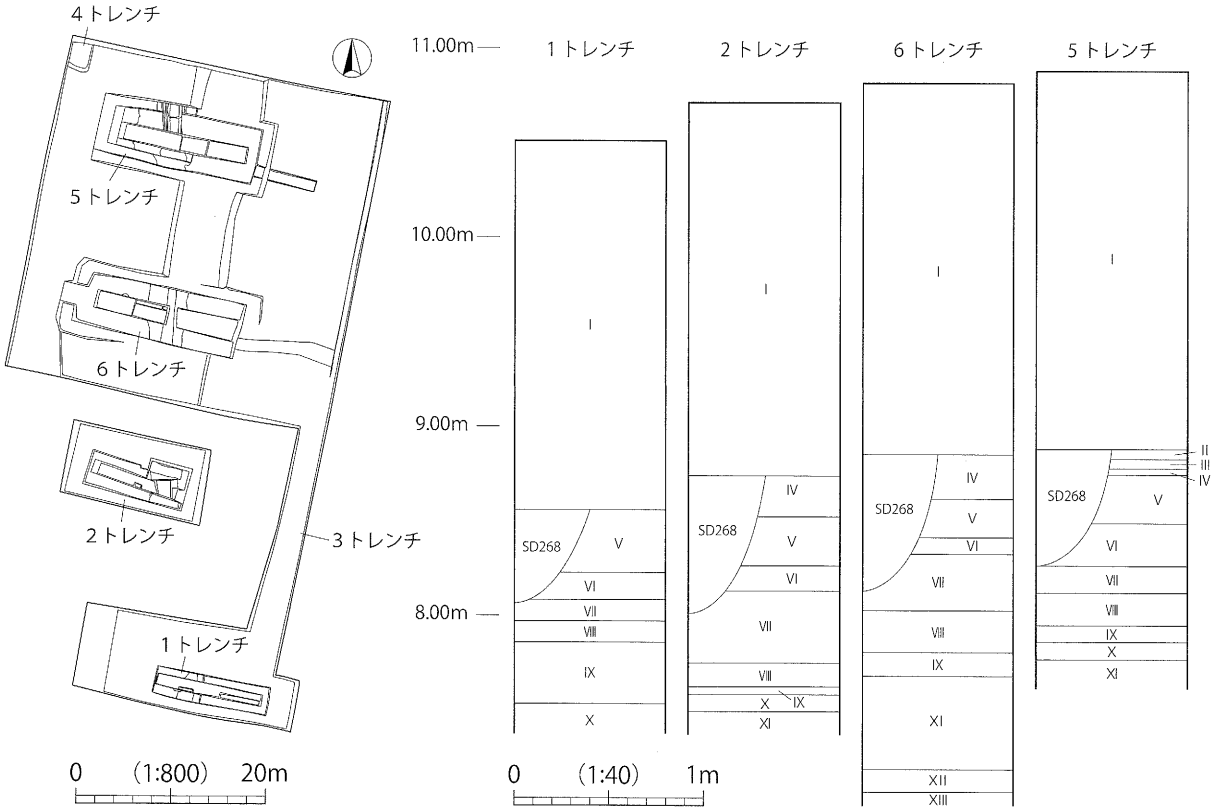
(国土地理院発行 1万分の1「長町」を一部改変)

第２図　調査区位置図

第４章　基本土層

現地は国鉄の貨物ヤードとして機能していた歴史があることから、地盤改良と考えられる大規模なカクランや石炭ガラの廃棄坑によって、周辺調査で確認されている古代の遺構確認面となる灰黄褐色～にぶい黄橙色砂質シルト層などは確認できなかった。基本土層は各トレンチの残存状況の良い壁面で行っており、分層は５トレンチを基準として行い、各トレンチとの対比を行っている。

Ⅰ層：暗褐色（10YR3/3）～明褐色（10YR6/6）の盛土層である。礫・石炭ガラを含む。
Ⅱ層：灰オリーブ色（5Y4/2）シルト層である。
Ⅲ層：オリーブ黒色（5Y3/2）粘土層である。
Ⅳ層：灰オリーブ色（5Y4/2）粘土質シルト層である。
Ⅴ層：灰オリーブ色（5Y4/2）砂質シルト層である。
Ⅵ層：灰色（5Y4/1）シルト層である。
Ⅶ層：暗オリーブ色（5Y4/3）砂層である。粒径の細かな砂層であり、灰色シルトブロックを含む。（河川堆積土）
Ⅷ層：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）シルト層である。（河川堆積土）
Ⅸ層：オリーブ灰色（2.5GY5/1）砂質シルト層である。（河川堆積土）
Ⅹ層：灰色（5Y5/1）粘土層である。斑状に下層の砂粒、マンガン、酸化鉄を少量含む。（河川堆積土）
Ⅺ層：にぶい黄橙色（10YR7/4）砂層である。粒径がやや粗く、直径１～３cm 大の小円礫を少量含む。（河川堆積土）
Ⅻ層：褐灰色（10YR6/1）砂質シルト層である。細砂をラミナ状に含む。（河川堆積土）
XIII層：青灰色（5BG6/1）砂質シルト層である。細砂を均質に含む。（河川堆積土）



第３図　基本土層

第５章　検出遺構と出土遺物

各トレンチで南北に延びるSD268溝跡を確認した。南側に設置した１・２トレンチでは、北側の５・６トレンチに比べ、国鉄時代のカクランにより上面を大きく壊されている。遺物は、SD268溝跡とカクランから土師器、須恵器、陶磁器、瓦質土器などが平箱で３箱程度出土している。

１．SD268溝跡（第４～６図）

平成20年度環状線西調査区で確認されていたSD268溝跡の延長部分と考えられる南北方向の溝跡である。１・２トレンチでは１条の溝跡と考えていたが、５・６トレンチでの断面観察の結果、掘り直しや重複と考えられる４時期の変遷が考えられた。トレンチによる部分的な調査のため全体の状況は不明である。このため、同一の機能を持った溝跡を長期間修復しながら使用したものか、同一地点で数条の溝跡が重複しているのかは明確に出来なかった。堆積土は14層に分層される。３層は５トレンチで５～７層を掘り込んでいる層で、溝幅が広く浅めの溝が埋まった後に、狭く深めの溝に掘り直したものと考えられる。８・９層は堆積する部分の底面と壁面の状況から、別の溝跡が重複しているものと考えられる。また、６トレンチで９層が12層を掘り込んでいることから、９層と12層には時期差があると考えられる。10～14層は１・２・６トレンチで確認した層である。これらの堆積状況から、１～４層をＡ期、５～７層をＢ期、８・９層をＣ期、10～14層をＤ期に伴うものととらえ、遺構と出土遺物について記載する。

（１）SD268A期（第５・６図）

２・５・６トレンチで確認した。２トレンチでは底面付近のみ検出された。規模は総長40ｍ以上で、５トレンチで上幅419㎝、下幅87㎝、深さ101㎝、６トレンチで上幅153㎝、下幅64㎝、深さ82㎝である。断面形は上半部が緩やかに広がる逆台形である。底面レベルを見ると北側が20㎝程度低くなっている。上面のほぼ全域が凝灰岩を多量に含む基本土層Ｉ層で埋め戻されており、国鉄時代に整地される直前まで溝として機能していたか窪地として残っていたと考えられる。５トレンチ北壁際では、レンガや木杭、角材、板材が組まれたような状態で出土しており、壁面を補強するために設置していた可能性が考えられる。１・２層は自然堆積、３層は締まりのない黒褐色砂質シルトと細砂の互層で流水と滞水が繰り返されていたと考えられる。４層は壁面補強の裏込め土と考えられる。遺物は18世紀代から19世紀後半～20世紀代にかけての磁器45点、陶器24点、白磁３点、クロム青磁１点、瓦質土器４点、レンガなどが出土している。このうち、肥前産磁器の碗、大堀相馬産陶器の土瓶・片口鉢、堤焼産の甕・鉢、在地産とみられる擂鉢、瓦質土器の焜炉・五徳、砥石を図示し、参考資料として18世紀代の肥前産磁器の碗と19世紀中頃の瀬戸・美濃産磁器の輪花皿を写真図版に掲載した。

（２）SD268B期（第６図）

５・６トレンチで確認した。規模は総長25ｍ以上で、５トレンチで上幅480㎝以上、深さ59㎝、６トレンチで上幅390㎝以上、深さ30㎝である。断面形は、東壁の形状は確認できないが、西壁では緩やかな立ち上がりである。６トレンチでの７層と９･12層との関係から設定した溝跡で、SD268A期以前の幅広の溝跡と考えられるが、カクランにより大きく壊されており詳細は不明である。５～７層は自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

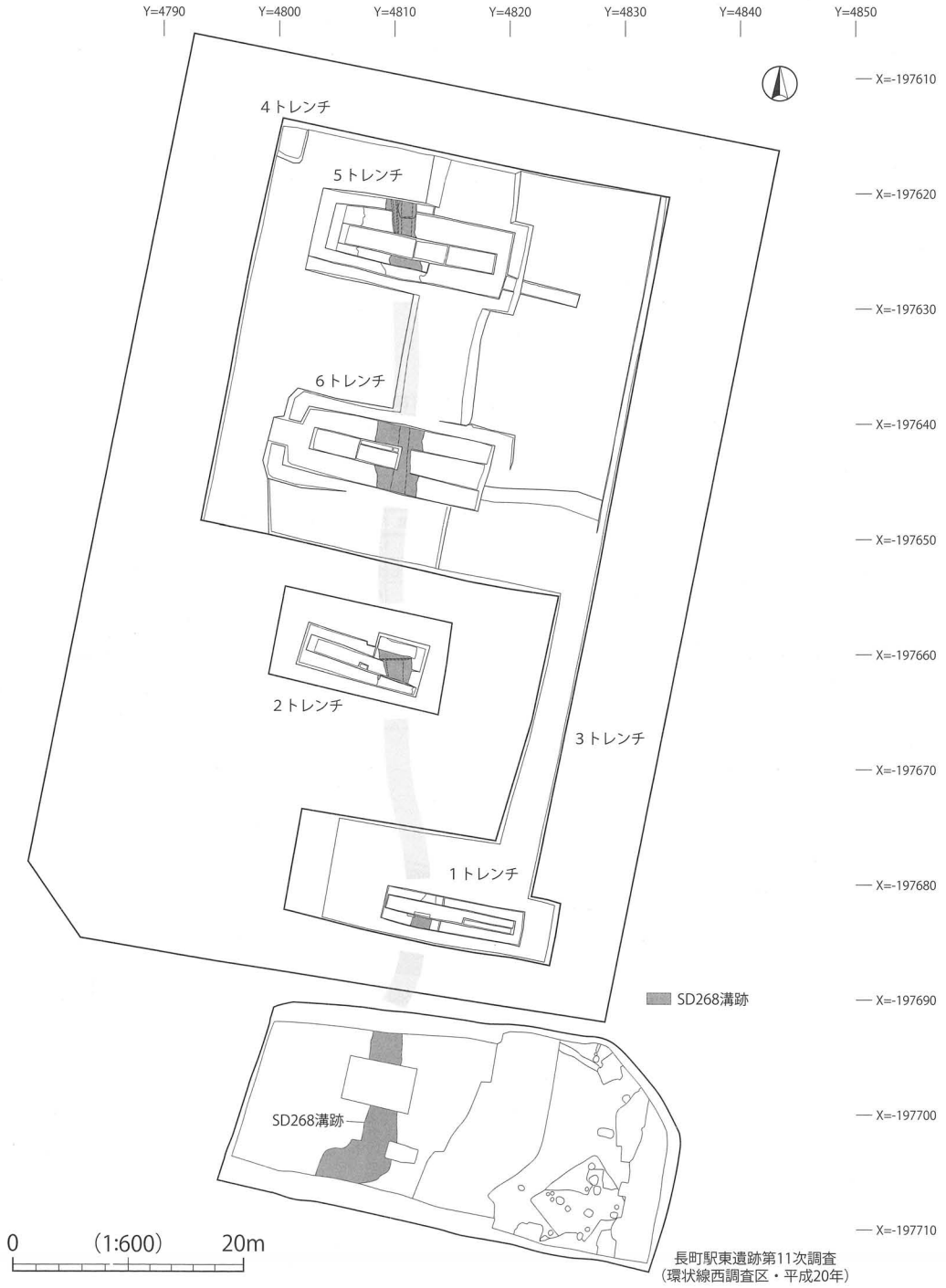
（３）SD268C期（第６図）

５・６トレンチで確認した。６トレンチでは底面付近のみ検出された。規模は総長21ｍ以上で、遺存状況が良い５トレンチで上幅118㎝、下幅33㎝、深さは58㎝である。断面形は５トレンチ北壁付近では上半部が緩やかに広がる逆台形である。底面レベルを見ると北側が25㎝程度低くなっている。８層は自然堆積と考えられ、９層は流水していた可能性がある。遺物は17世紀代から19世紀後半～20世紀代にかけての陶器５点が出土している。

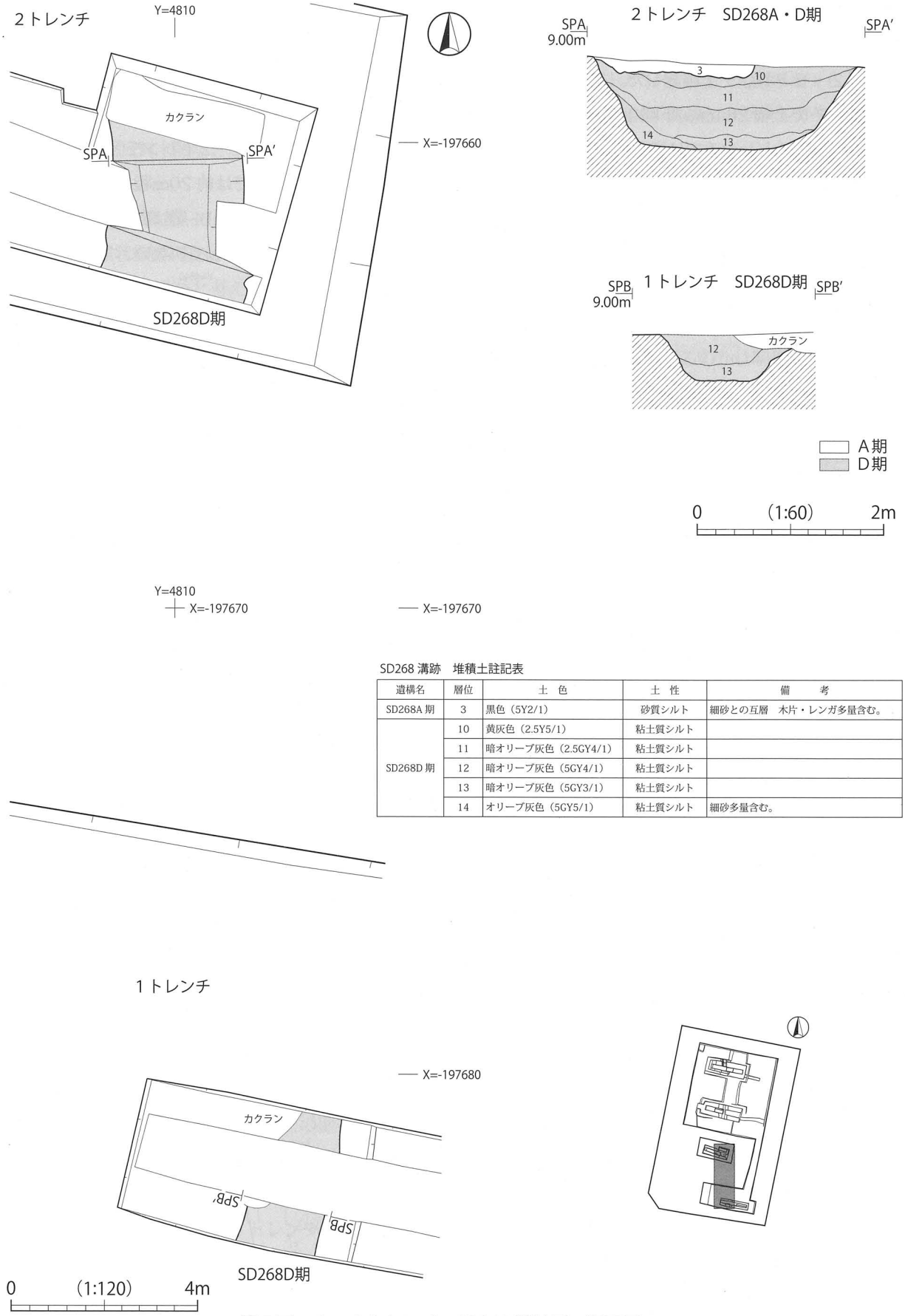
このうち、大堀相馬産乗燭と堤焼産小型甕を図示した。

（4）SD268D 期（第５・６図）

１・２・６トレンチで確認した。規模は総長 44 m以上で、１トレンチで上幅 165㎝、下幅 58㎝、深さ 49㎝、２トレンチで上幅 284㎝、下幅 152㎝、深さ 99㎝、６トレンチで上幅 327㎝、下幅 126㎝、深さ 65㎝である。断面形は１・２トレンチでは逆台形、６トレンチでは弧状の立ち上がりとなり、１・２トレンチとは規模・形状が異なる。底面レベルを見ると１・６トレンチではほぼ同じレベルで、２トレンチでは約 20㎝程度低くなっている。各トレンチの検出位置や堆積土が類似していることから、同一の溝跡とした。10 ～ 14 層は自然堆積と考えられ、堆積状況から A ～ C 期と D 期にはやや時期差があるものと考えられる。遺物は出土していない。



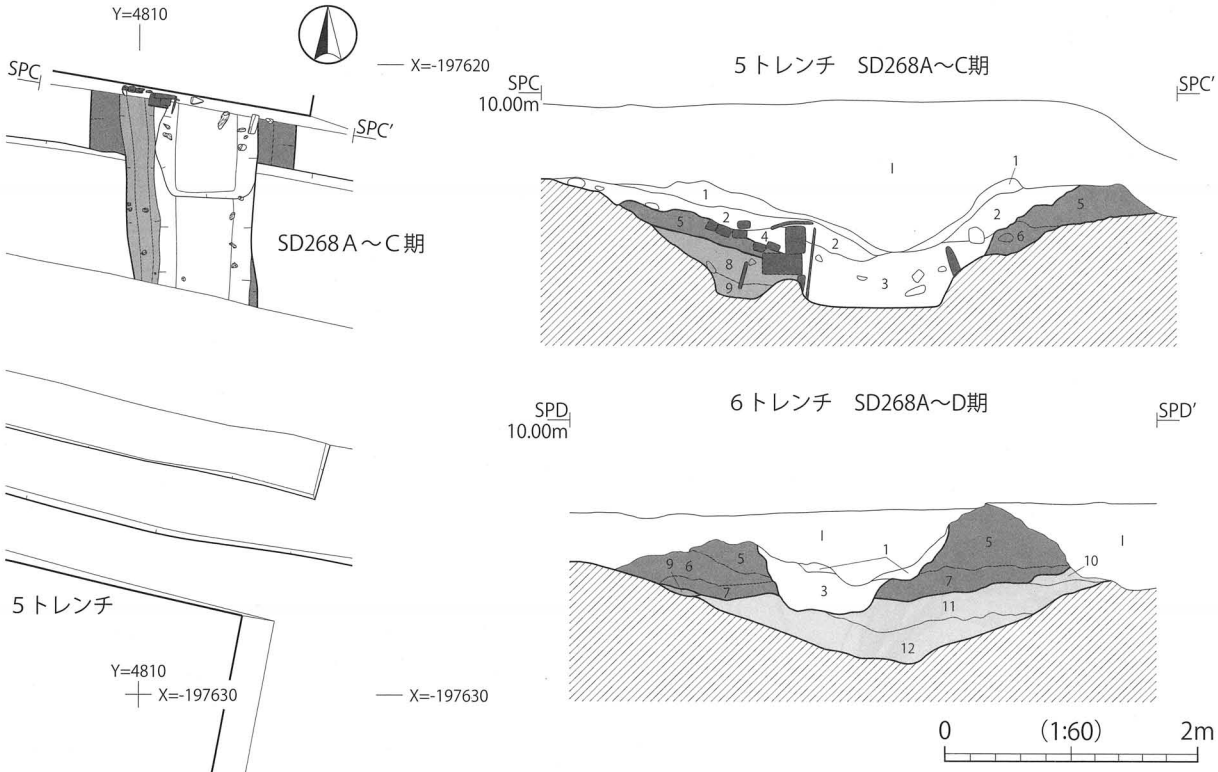
第４図　遺構配置図

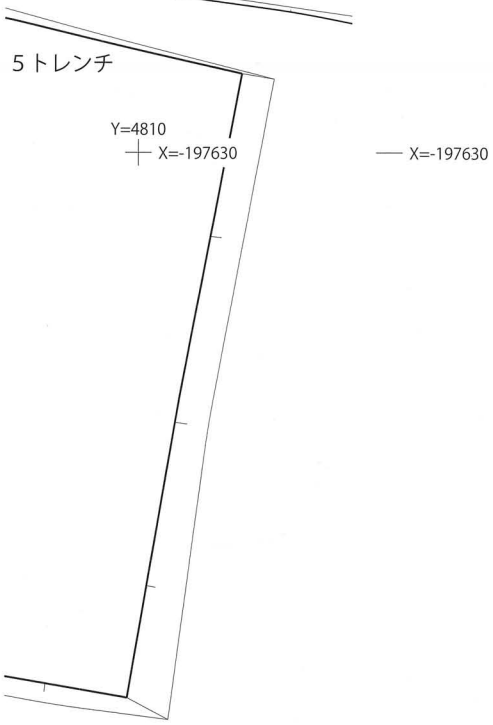


SD268 溝跡　堆積土註記表

遺構名	層位	土　色	土　性	備　　考
SD268A 期	3	黒色（5Y2/1）	砂質シルト	細砂との互層　木片・レンガ多量含む。
SD268D 期	10	黄灰色（2.5Y5/1）	粘土質シルト	
	11	暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）	粘土質シルト	
	12	暗オリーブ灰色（5GY4/1）	粘土質シルト	
	13	暗オリーブ灰色（5GY3/1）	粘土質シルト	
	14	オリーブ灰色（5GY5/1）	粘土質シルト	細砂多量含む。

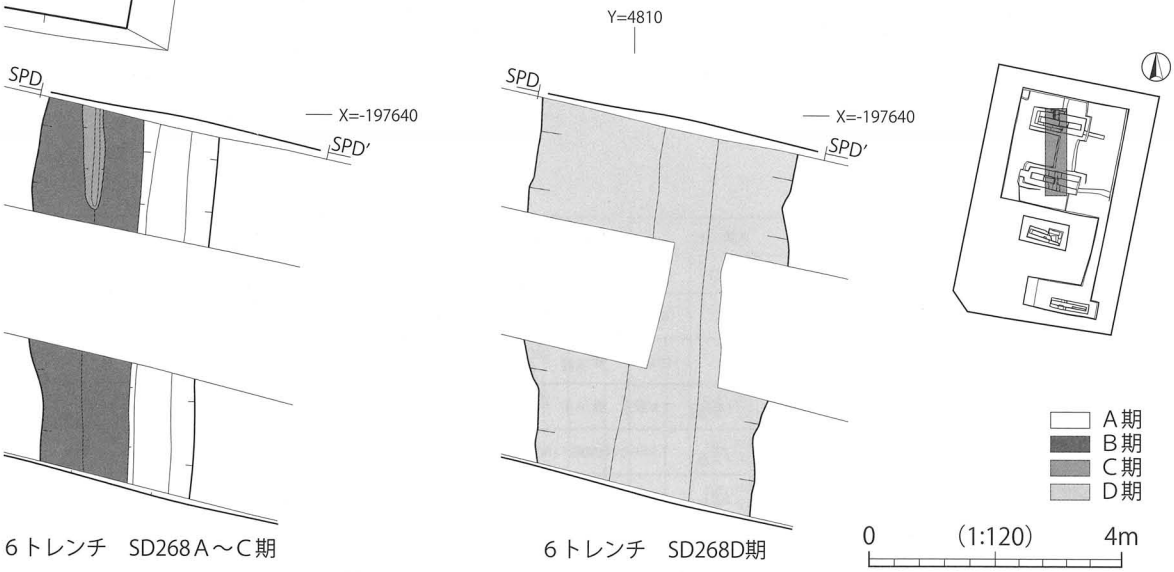
第５図　１・２トレンチ　SD268 溝跡平・断面図



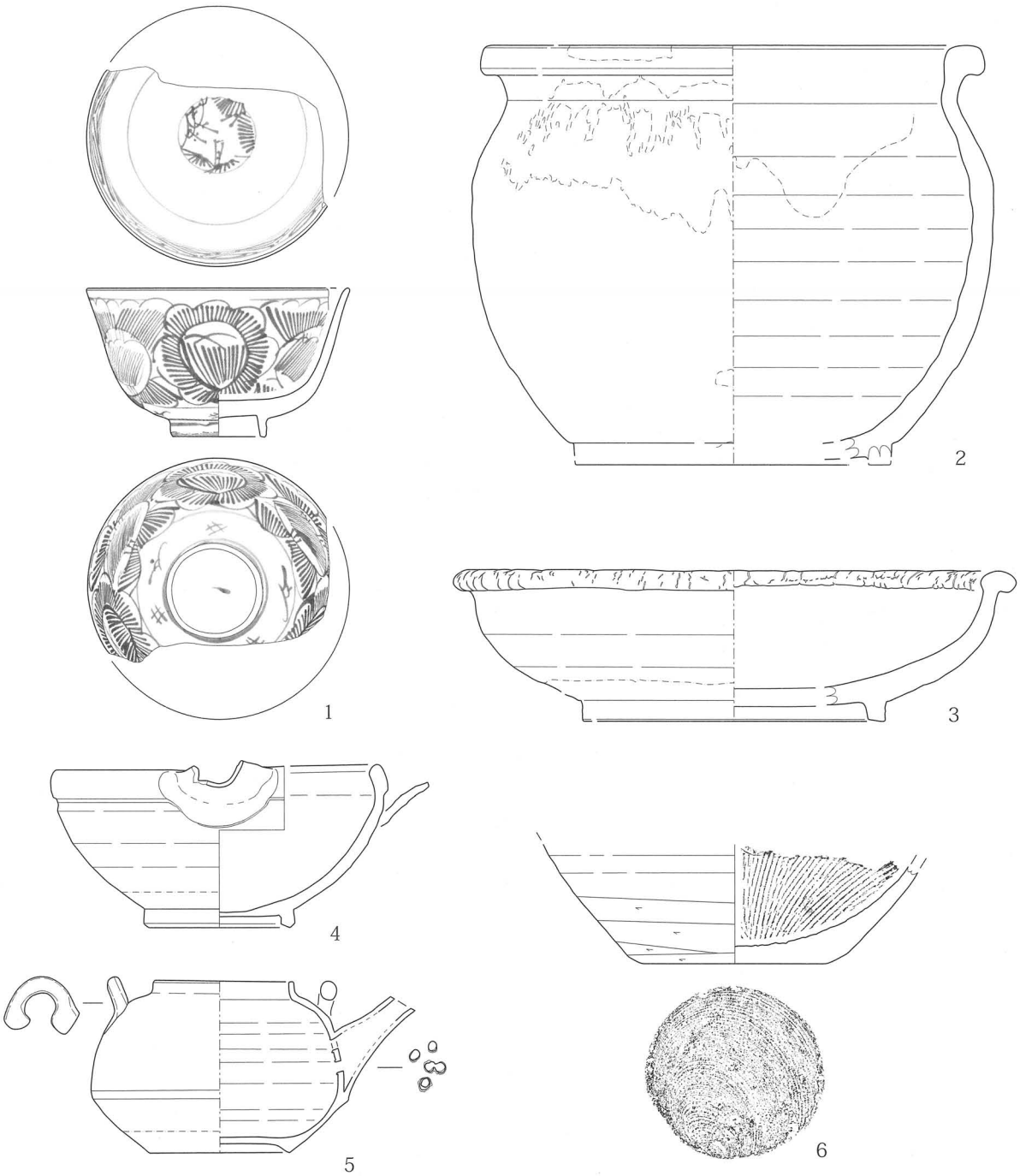


SD268 溝跡　堆積土註記表

遺構名	層位	土　色	土　性	備　　考
SD268A 期	1	黒色（2.5Y2/1）	粘土	上面を凝灰岩の礫で埋め戻されている。
	2	黒褐色（2.5Y3/1）	砂質シルト	焼土粒・炭化物粒・小礫多量含む。
	3	黒色（5Y2/1）	砂質シルト	細砂との互層　木片・レンガ多量含む。
	4	黒色（2.5Y2/1）	シルト	小礫・木片・レンガ少量含む。
SD268B 期	5	黄灰色（2.5Y4/1）	砂質シルト	焼土粒・炭化物・木片中量含む。
	6	灰色（5Y5/1）	シルト	小礫・木片中量含む。
	7	黄灰色（2.5Y4/1）	粘土質シルト	炭化物・木片少量含む。
SD268C 期	8	オリーブ黒色（5Y3/1）	シルト	小礫・木片少量含む。
	9	灰色（5Y4/1）	砂質シルト	細砂をラミナ状に含む。
SD268D 期	10	黄灰色（2.5Y5/1）	粘土質シルト	
	11	暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）	粘土質シルト	
	12	暗オリーブ灰色（5GY4/1）	粘土質シルト	



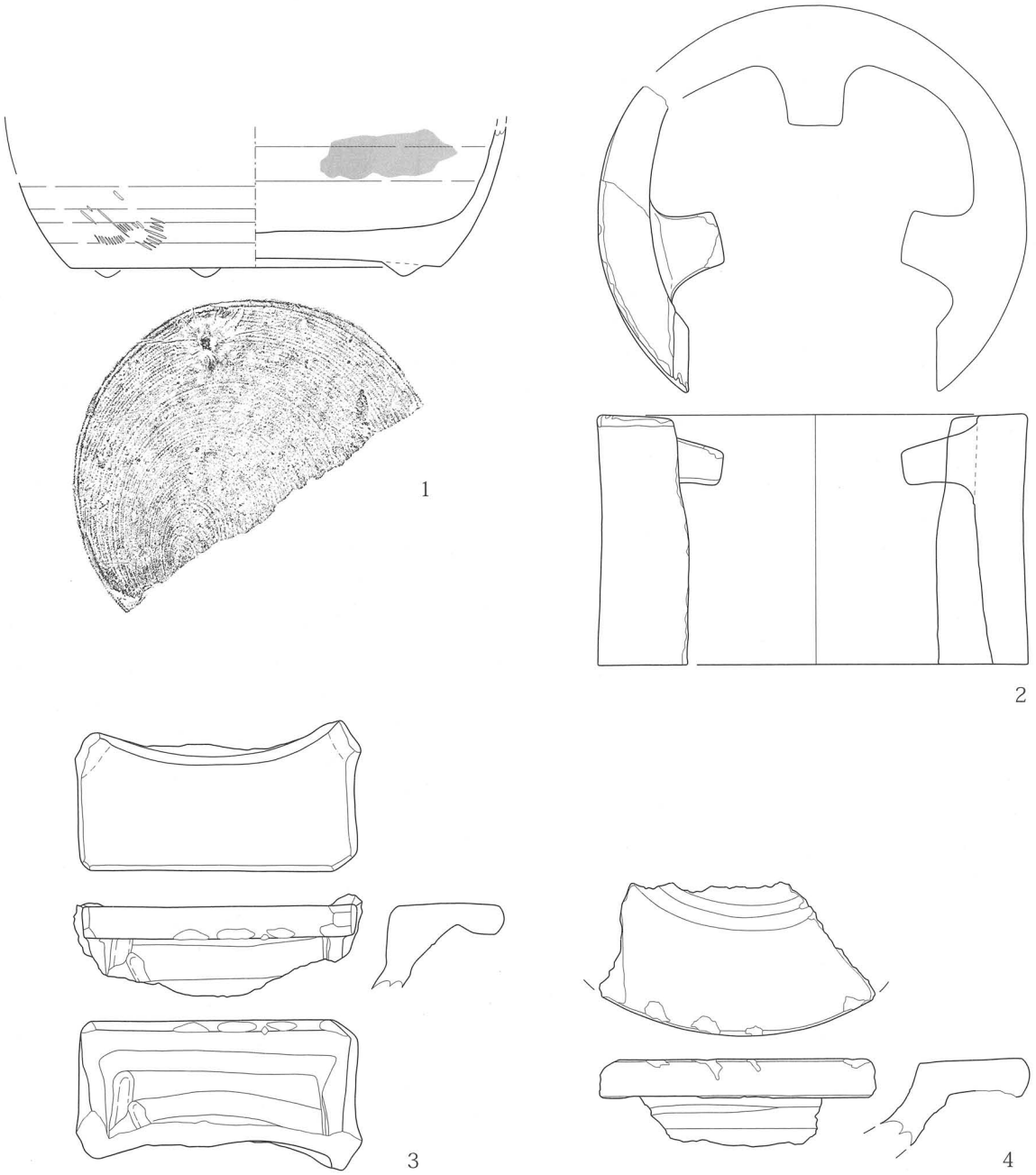
第6図　5・6トレンチ　SD268 溝跡平・断面図



SD268A 期溝跡出土遺物観察表（1）

図版番号	写真図版番号	出土地点	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	3 - 1	5トレンチ SD268A 期	磁器	碗	口縁～高台	密	(12.2)	4.3	6.9	肥前	19C 中頃（幕末～明治）	染付　外面：素描花文　内面：四方襷文 見込：松梅文　焼継痕　高台内：赤色顔料を含む焼継剤が付着	J - 1
2	3 - 2	5トレンチ SD268A 期	陶器	甕	口縁～高台	やや粗	(23.4)	—	19.2	堤	19C 後半～ 20C（明治以降）	海鼠釉	I - 1
3	3 - 3	5トレンチ SD268A 期	陶器	鉢	口縁～高台	やや粗	(24.6)	(14.0)	7.0	堤	19C 後半～ 20C（明治以降）	海鼠釉	I - 2
4	3 - 5	5トレンチ SD268A 期	陶器	片口鉢	口縁～高台	やや密	15.6	7.0	7.5	大堀相馬	18C 後半～ 19C 代	白濁釉	I - 3
5	3 - 6	5トレンチ SD268A 期	陶器	土瓶	口縁～高台	やや密	6.5	6.6	8.0	大堀相馬	19C 代	灰釉	I - 4
6	3 - 4	5トレンチ SD268A 期	陶器	擂鉢	体部～高台	やや粗	—	6.4	(5.5)	在地	19C 前半カ	底部まで鉄釉が掛かる　底部回転糸切り	I - 5

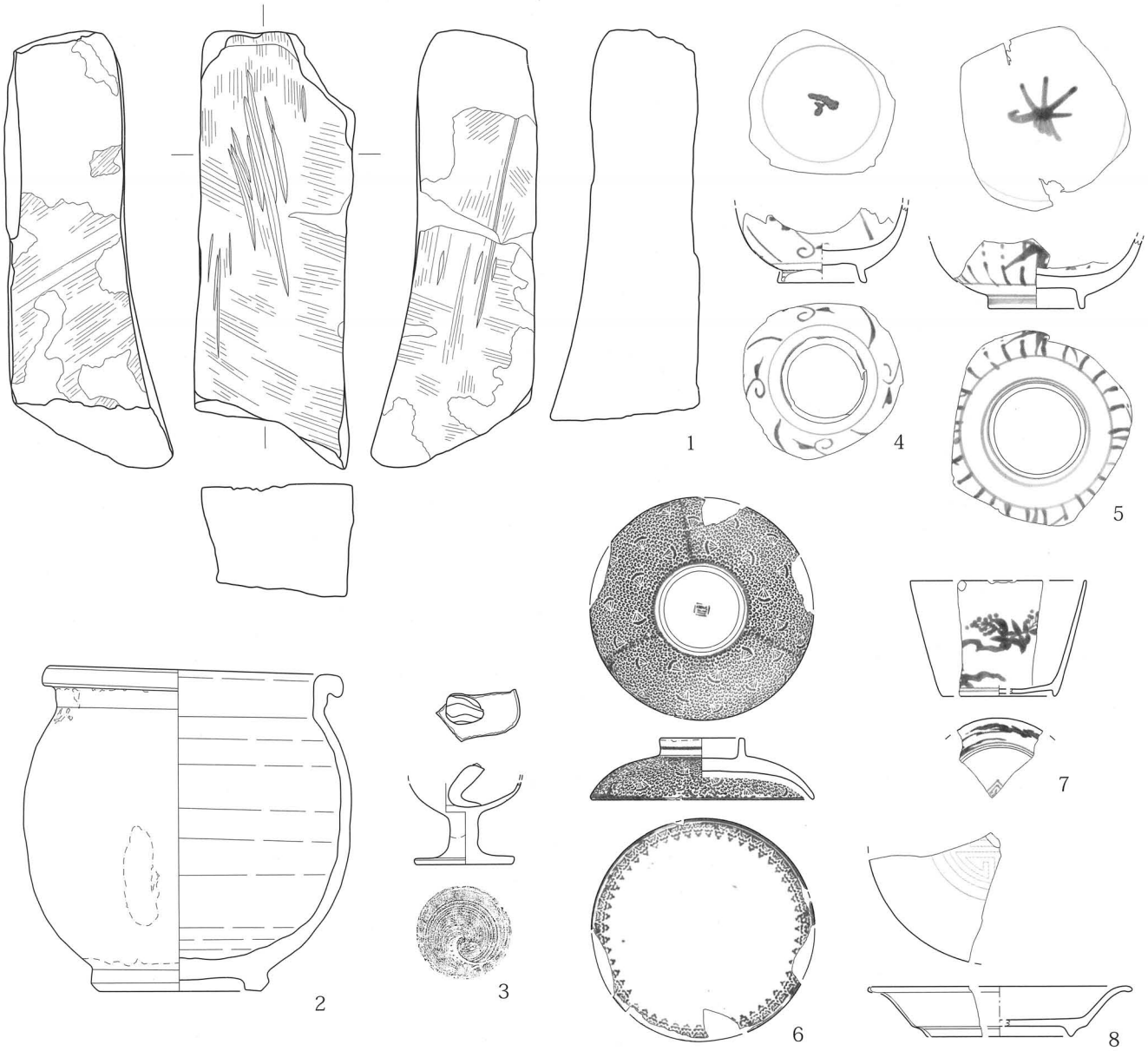
第７図　SD268A 期溝跡出土遺物（1）



SD268A 期溝跡出土遺物観察表（2）

図版番号	写真図版番号	出土地点	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	3 - 7	5トレンチ SD268A 期	瓦質土器	焜炉	体部～高台	やや粗	—	(16.2)	(6.6)	在地	19C 中頃（幕末～明治）	三足脚　内面に炭化物付着　底部回転糸切り	I - 6
2	3 - 8	5トレンチ SD268A 期	瓦質土器	五徳	口縁～底部	やや粗	(18.8)	—	11.0	在地	19C 中頃（幕末～明治）		I - 7
3	3 - 9	5トレンチ SD268A 期	瓦質土器	焜炉	張り出し部	やや粗	—	—	—	在地	19C 中頃（幕末～明治）		I - 8
4	3 - 10	5トレンチ SD268A 期	瓦質土器	焜炉	口縁	やや粗	—	—	—	在地	19C 中頃（幕末～明治）		I - 9

第８図　SD268A 期溝跡出土遺物（２）



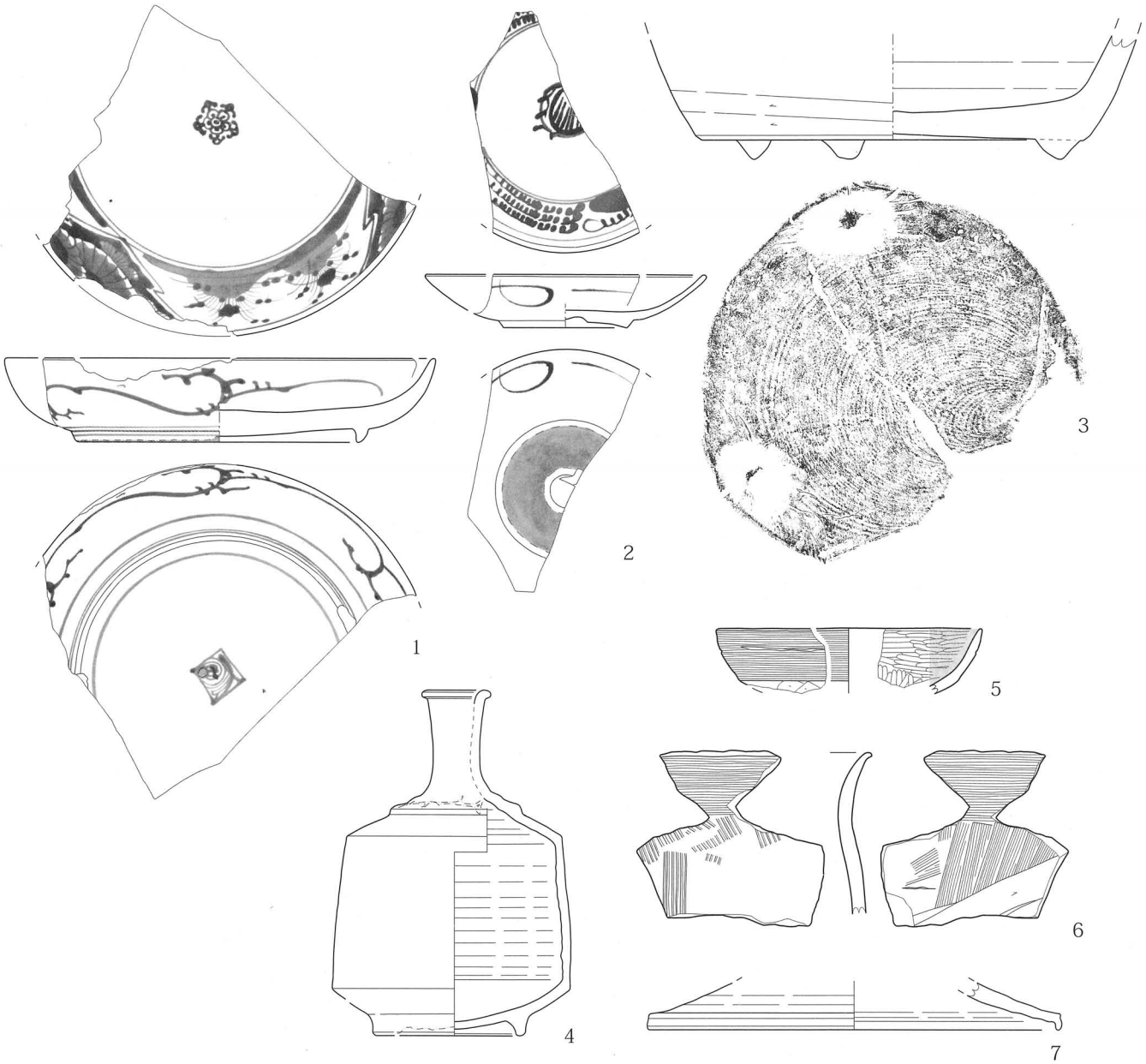
SD268A 期溝跡出土遺物観察表（3）

図版番号	写真図版番号	出土地点	種別	器種	法量（cm）			重量（g）	石材	備考	登録番号
					長さ	幅	厚さ				
1	3 - 11	5トレンチ SD268A 期	石製品	砥石	20.0	6.5	6.1	1241	砂岩	完形品、面取り、柱状、無孔、溝状痕あり	K - 1

SD268C 期溝跡・カクラン出土遺物観察表

図版番号	写真図版番号	出土地点	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
2	3 - 12	5トレンチ SD268C 期	陶器	甕	口縁～高台	やや粗	13.2	7.5	14.9	堤	19C 後半～ 20C（明治以降）	海鼠釉	I - 10
3	3 - 13	5トレンチ SD268C 期	陶器	乗燭	体部～底部	やや密	—	4.4	(4.6)	大堀相馬	18C 後半以降	鉄釉　底部回転糸切り	I - 11
4	4 - 1	5トレンチ カクラン	磁器	碗	体部～高台	密	—	4.0	3.4	肥前	19C 前半	染付　外面：霊芝文	J - 2
5	4 - 2	5トレンチ カクラン	磁器	碗	体部～高台	密	—	4.4	(3.2)	肥前	19C 中頃（幕末～明治）	染付　外面：竹林文	J - 3
6	4 - 3	5トレンチ カクラン	磁器	碗の蓋	口縁～高台	密	10.2	3.8	2.8	瀬戸・美濃	19C 後半（明治）	型紙摺絵　外面：みじん唐草松散らし文 内面：瓔珞文　高台内：銘有	J - 4
7	4 - 4	5トレンチ カクラン	磁器	猪口	口縁～高台	密	(7.8)	(5.2)	5.2	肥前	18C 代	染付　外面：草木文（南天ヵ） 高台内：二重枠の銘	J - 5
8	4 - 5	5トレンチ カクラン	磁器	皿	口縁～高台	密	(12.2)	(6.6)	2.3	瀬戸・美濃	19C 後半（明治）	白磁 見込：寿字文陰刻	J - 6

第９図　SD268A・C 期溝跡、カクラン出土遺物



カクラン出土遺物観察表（1）

図版番号	写真図版番号	出土地点	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	4 - 6	カクラン	磁器	皿	口縁～高台	密	(19.8)	17.0	3.9	肥前	18C 代	染付　外面：蔓草文　高台内：枠付渦福文 内面：松皮菱に菊花文・草花文　見込：手描き五弁花　目跡	J - 7
2	4 - 7	6トレンチ カクラン	磁器	皿	口縁～高台	密	(12.8)	(5.8)	2.4	瀬戸・美濃	19C 中頃 （幕末～明治）	洋呉須染付　外面：草文　蛇ノ目凹形高台 内面：みじん唐草文　見込：荒磯文	J - 8
3	4 - 8	5トレンチ カクラン	瓦質土器	焜炉	体部～高台	やや粗	—	(18.4)	(5.8)	在地	19C 中頃 （幕末～明治）	三足脚　底部回転糸切り	I - 12
4	4 - 9	6トレンチ カクラン	陶器	徳利	口縁～高台	やや密	3.1	6.6	16.0	大堀相馬	19C 中頃 （幕末～明治）	口縁：黒釉 体部：白濁釉　油壺ヵ	I - 13

カクラン出土遺物観察表（2）

図版番号	写真図版番号	出土地点	種別	器種	法量（cm）			外面調整	内面調整	備考	登録番号
					口径	底径	器高				
5	4 - 10	カクラン	土師器	坏	(12.2)	—	(3.0)	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	口縁部～体部ミガキ、黒色処理		C - 1
6	4 - 12	カクラン	土師器	甕	—	—	(7.4)	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ・ヘラケズリ		C - 2
7	4 - 11	カクラン	須恵器	坏蓋	(19.2)	—	(2.2)	ロクロ調整	ロクロ調整		E - 1

第10図　カクラン出土遺物

2．出土遺物について

今回の調査では、SD268 溝跡とカクランから、土師器、須恵器、石器、磁器、陶器、瓦質土器、近代瓦、レンガなどが出土し、接合作業後の総数は 316 点である（第 1 表）。出土地点別では、カクラン 219 点（69％）、SD268A 期 92 点（29％）、SD268C 期 5 点（２％）で、大半がカクランからの出土である。ここでは、これまで長町駅東遺跡での出土例が少ない近世から近代にかけての遺物について概観する。

第 1 表　長町駅東遺跡出土遺物数量一覧表

遺構	土師器	須恵器	石器	磁器	白磁	青磁（クロム）	陶器	瓦質土器	近代瓦	レンガ	不明・その他	合　計
カクラン	25	6		125	10	3	39	3			8	219
SD268A 期	2		1	45	3	1	24	4	1	8	3	92
SD268C 期							5					5
合　計	27	6	1	170	13	4	68	7	1	8	11	316

（1）陶磁器の出土傾向

陶磁器は 17 世紀代から 20 世紀代までの各時期のものが出土しており、磁器 170 点、白磁 13 点、クロム青磁 4 点、陶器 68 点、総数 255 点である。このうち、小片のため時期・産地が判別できないものを除いた 229 点を産地別・時期別に分類して集計した。出土数全体でみると瀬戸・美濃産磁器が 114 点（50％）で大半を占め、地方窯産磁器 38 点（17％）、大堀相馬産陶器 37 点（16％）などが出土している（第 2 表）。時期別では、19 世紀後半～ 20 世紀（明治時代以降）のもの 132 点（58％）、19 世紀後半（明治時代前半）のもの 42 点（18％）、19 世紀中頃（幕末から明治時代）のものが 18 点（8％）で、19 世紀後半以降のものが大半を占めている（第 3 表）。そのほか、17 世紀代の岸窯産擂鉢（写真図版 4 － 16）が出土している。

第 2 表　陶磁器出土地点別産地別数量一覧表

遺構	磁器				陶器							合　計
	瀬戸・美濃	肥前	地方窯	平清水	大堀相馬	堤	在地	岸	地方窯	瀬戸・美濃	常滑	
カクラン	79	11	35	1	26	7		1	1	1		162
SD268A期	35	5	3	1	9	3	4		1	1	1	63
SD268C期					2	1		1				4
合　計	114	16	38	2	37	11	4	2	2	2	1	229

第 3 表　陶磁器出土地点別年代別数量一覧表

遺構	17C 代	18C 代	18C 後半～ 19C 代	19C 代	19C 前半	19C 中頃	19C 後半	19C 後半～ 20C 代	20C 代	合　計
カクラン	1	3	2	13	4	12	27	99	1	162
SD268A 期		1	1	5	1	6	15	32	2	63
SD268C 期	1		1		1			1		4
合　計	2	4	4	18	6	18	42	132	3	229

（2）SD268A 期溝跡出土遺物について

SD268A 期からは 92 点の遺物が出土している（第 1 表）。このうち、産地・時期が判別できる陶磁器は 63 点である（第 4 表）。磁器の産地別組成は、瀬戸・美濃産 35 点、肥前産 5 点、地方窯産 3 点、平清水産 1 点で、瀬戸・美濃産が 80％を占める。磁器の器種別組成は、碗 19 点で磁器全体の 43％を占めている。このほか、皿 10 点、土瓶・急須 7 点、燗徳利 5 点、酒坏・小杯 3 点が出土している。このうち、瀬戸・美濃産の碗が 15 点で、磁器全体の 34％を占めている。磁器で染付がみられるものは 35 点ある（第 5 表）。手描きや型紙摺りによる絵付けのほか、明治時代後半に出現する銅版転写による絵付けのものがみられる。このほか、18 世紀代のコンニャク印判による絵付けの肥前産碗（写真図版 4 － 13）が出土している。磁器には、焼継による補修痕があるものが 3 点確認された。内訳は 19 世紀中頃の肥前産碗（第 7 図 － 1）と瀬戸・美濃産碗（写真図版 4 － 14）各 1 点、19 世紀後半の瀬戸・美濃産燗徳利 1 点である。また、肥前産碗（第 7 図 － 1）の高台内には、焼継剤に赤色顔料を混ぜたものが付着しており、川内 B 遺跡で報告されているような、焼継師が発注者を識別するための記号と同様の意味を持つ可能性

が高い。

陶器の産地別組成は、大堀相馬産９点、在地産４点、堤産３点、地方窯産１点、瀬戸・美濃産１点、常滑産１点で、大堀相馬産が47％を占める。器種別組成は、土瓶・急須６点、甕５点で陶器全体の58％を占めている。そのほか、底部外面まで鉄釉が掛かる在地産擂鉢（第７図 － ６）が出土しており、出土例が少なく注目される。

瓦質土器は、焜炉３点、五徳１点、不明１点、総数５点が出土しており、いずれも19世紀中頃のものである。焜炉は、全体の形状は不明だが、三足のもの（第８図 － １）や焚口下部の張り出し部（第８図 － ２）などがみられる。

第４表　SD268A 期溝跡出土陶磁器年代別産地別数量一覧表

	磁器												陶器												合計
	瀬戸・美濃					肥前			地方窯			平清水	大堀相馬					在地		堤		地方窯	美濃	常滑	
	碗	皿	燗徳利	酒坏小杯	土瓶急須	碗	皿	土瓶急須	碗	皿	土瓶急須	燗徳利	土鍋	片口鉢	土瓶急須	燗徳利	徳利	甕	擂鉢	甕	鉢	徳利	徳利	土瓶急須	
18C 代						1																			1
18C 後半～19C 代														1											1
19C 代															3			1		1					5
19C 前半																			1						1
19C 中頃	1	2				1	1									1									6
19C 後半	3	4	2	1	1	1						1					1	1							15
19C 後半～20C 代	10	2	2	2	3			1	1	1	1		1		2			1		1	1	1	1	1	32
20C 代	1				1																				2
合　計	15	8	4	3	5	3	1	1	1	1	1	1	1	1	5	1	1	3	1	2	1	1	1	1	63

第５表　SD268A 期溝跡出土磁器産地別年代別絵付け数量一覧表

産地	絵付け	18C 代	19C 中頃	19C 後半	19C 後半～20C 代	合　計
瀬戸・美濃	染付		1	8	8	17
	摺絵			2	1	3
	銅版転写				7	7
肥前	コンニャク印判	1				1
	染付		2			2
	摺絵			1	1	2
地方窯	摺絵				2	2
平清水	染付			1		1

第6章　まとめ

（1）今回の調査区は、平成20年度に調査を実施した長町駅東遺跡第11次調査（環状線西調査区）の北側に隣接しており、近世～近代と考えられる溝跡を検出した。

（2）検出された溝跡は、平成20年度に確認されたSD268溝跡の北側延長部分と考えられ、掘り直しや重複と考えられる4時期の変遷が認められた。トレンチによる部分的な調査のため、同一の機能を持った溝跡を長期間修復しながら使用したものか、同一地点で数条の溝跡が重複しているのかは明確に出来なかった。

（3）SD268A期では、木杭や板材、角材、レンガを組み合わせて壁面の補強を行っていることが確認された。

（4）SD268A期は出土遺物及び国鉄時代に整地される直前まで窪地として残っていたことから、19世紀後葉から20世紀前葉にかけての溝跡と考えられる。SD268C期は堤産の甕が出土しており、19世紀後半以降の溝跡とみられる。SD268B・D期は遺物が出土していないため、帰属時期を特定できなかった。

（5）想定された古代の遺構確認面は、国鉄時代に大規模なカクランを受けており削平されていた。

（6）2・5・6トレンチの下層から河川堆積土と考えられる砂層が認められ、調査区のほぼ全域に河川跡が広がっていることが考えられる。

（7）遺物は土師器・須恵器・磁器・陶器・瓦質土器など平箱3箱程度出土しており、19世紀後半以降の瀬戸・美濃産磁器が大半を占めている。

＜参考文献＞
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1999『東北大学埋蔵文化財調査年報』11
仙台市教育委員会　2000『王ノ壇遺跡―都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡―発掘調査報告書Ⅰ』仙台市文化財調査報告書249集
仙台市史編さん委員会　2004『仙台市史　通史編5　近世3』
菅原　保則　2006『長町駅』
仙台市教育委員会　2007A『川内A遺跡―仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ―』仙台市文化財調査報告書312集
仙台市教育委員会　2007B『長町駅東遺跡第4次調査』仙台市文化財調査報告書315集
仙台市教育委員会　2011A『桜ヶ岡公園遺跡―仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ―』仙台市文化財調査報告書384集
仙台市教育委員会　2011B『川内B遺跡―仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅴ―』仙台市文化財調査報告書385集

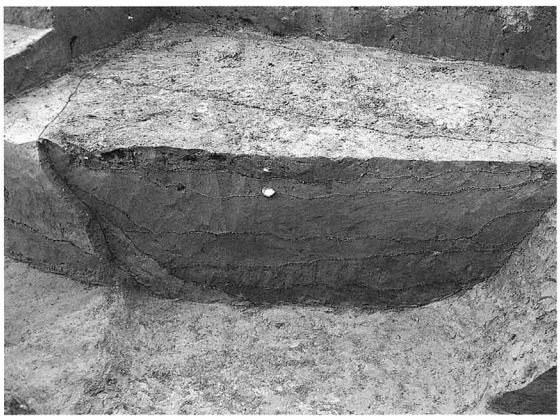
写　真　図　版

調査区北半部全景（南東から）

1トレンチ全景（西から）

1トレンチ SD268 溝跡土層断面（北から）

2トレンチ全景（北西から）



2トレンチ SD268 溝跡土層断面（南から）

写真図版　1

3 トレンチ土層断面（南から）

4 トレンチ土層断面（南から）

5 トレンチ全景（西から）

5 トレンチ SD268 溝跡土層断面（南から）

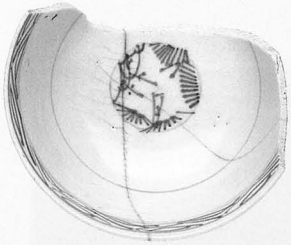
6 トレンチ全景（西から）

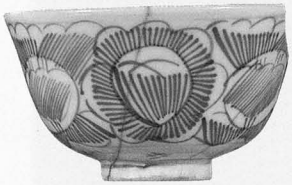
6 トレンチ SD268 溝跡土層断面（南から）

6 トレンチ下層土層断面（南から）

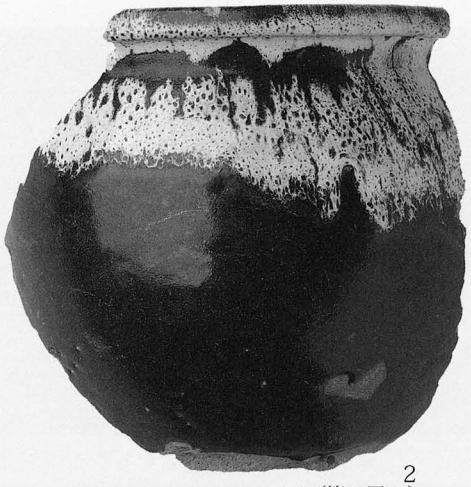
作業風景

写真図版　2

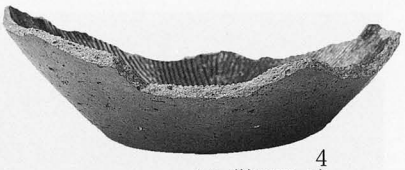




1
J-1（第７図-1）



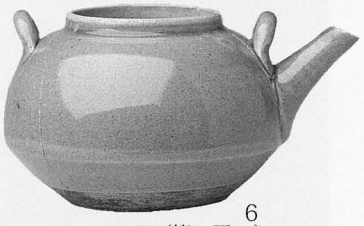
2
I-1（第７図-2）



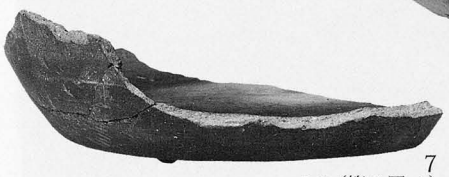
4
I-5（第７図-6）

5
I-3（第７図-4）

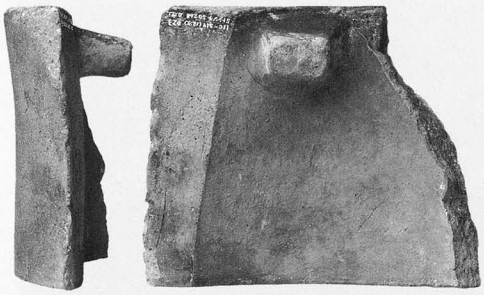
3
I-2（第７図-3）



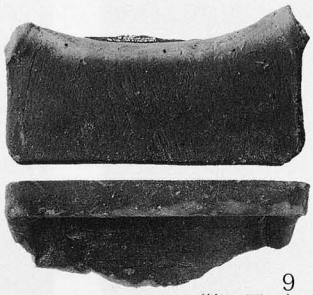
6
I-3（第７図-5）



7
I-6（第８図-1）

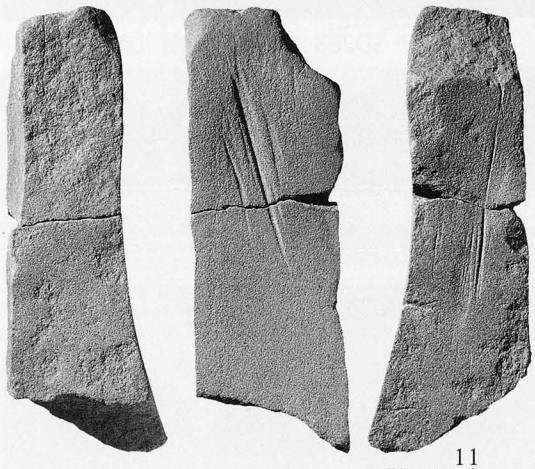


8
I-7（第８図-2）



9
I-8（第８図-3）

10
I-9（第８図-4）

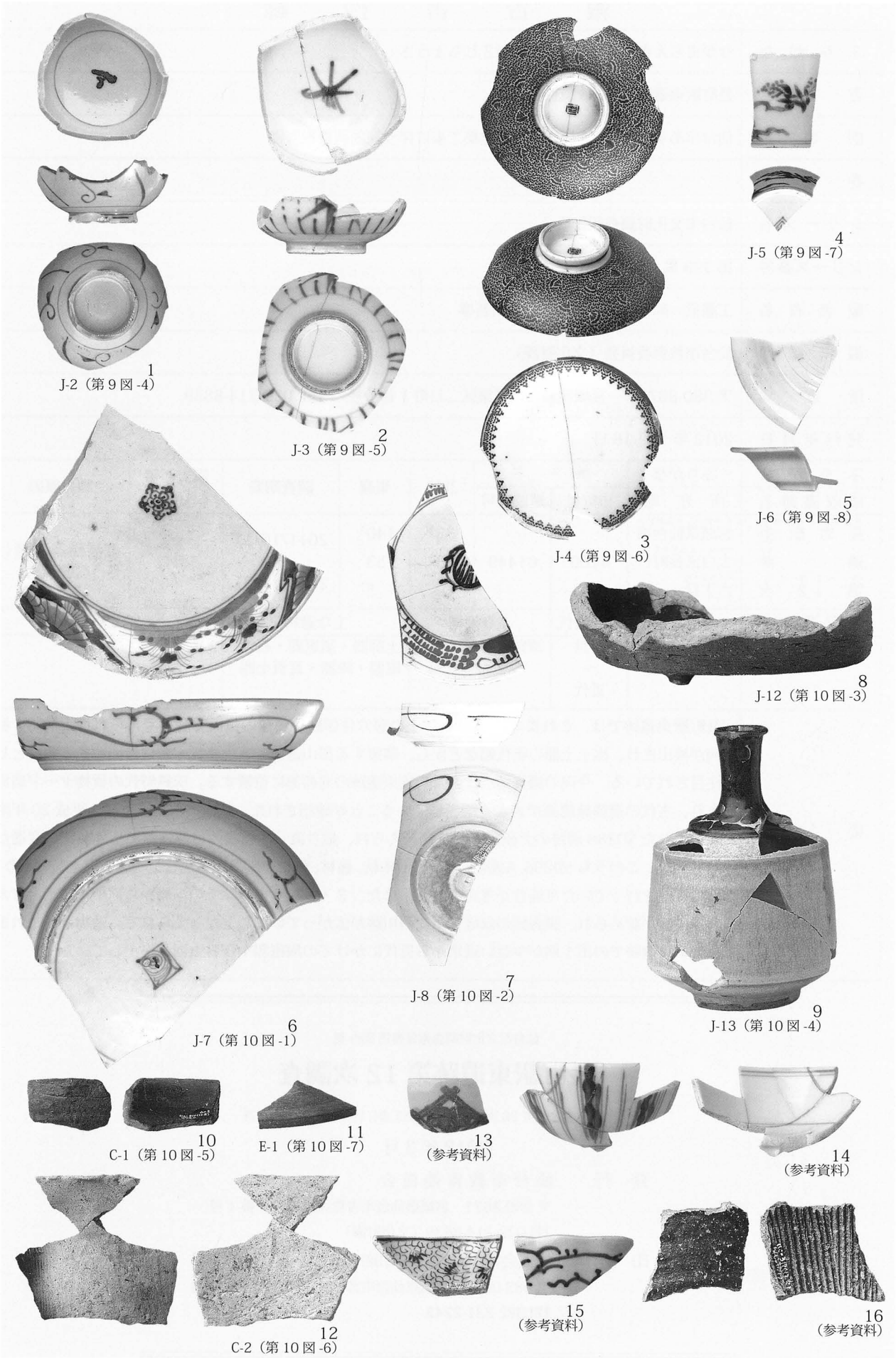


11
K-1（第９図-1）

12
I-10（第９図-2）

13
I-11（第９図-3）

写真図版　3


1
J-2（第９図-4）
2
J-3（第９図-5）
3
J-4（第９図-6）
4
J-5（第９図-7）
5
J-6（第９図-8）
6
J-7（第10図-1）
7
J-8（第10図-2）
8
J-12（第10図-3）
9
J-13（第10図-4）
10
C-1（第10図-5）
11
E-1（第10図-7）
12
C-2（第10図-6）
13
（参考資料）
14
（参考資料）
15
（参考資料）
16
（参考資料）

写真図版　4

報　告　書　抄　録

ふりがな	ながまちえきひがしいせきだい12じちょうさ
書名	長町駅東遺跡第12次調査
副書名	仙台市あすと長町28街区・店舗建築工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第399集
編著者名	工藤信一郎　水野一夫　小川長導
編集機関	仙台市教育委員会（文化財課）
所在地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区二日町1番1号　TEL 022-214-8839
発行年月日	2012年3月16日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
長町駅東遺跡第12次 （ながまちえきひがしいせきだいじゅうにじ）	宮城県仙台市太白区長町六丁目 （みやぎけんせんだいしたいはくくながまちろくちょうめ）	4100	01449	38°13′19″	140°53′5″	2011/10/11～2011/11/21	1,641	店舗建築工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長町駅東遺跡	集落跡	近世～近代	溝跡	土師器・須恵器・石器 磁器・陶器・瓦質土器	

要約

長町駅東遺跡では、これまでに300軒以上の竪穴住居跡や集落の区画施設と考えられる大溝跡・材木列が検出され、出土土器の年代幅などから、隣接する郡山遺跡の官衙造営・運営に関連する遺跡として注目されている。今回の調査地点は、長町駅東遺跡の北西部に位置する。国鉄時代の貨物ヤード造成により、古代の遺構確認面が大きく壊されていることが確認された。検出された溝跡は、平成20年度に確認されたSD268溝跡の北側延長部分と考えられ、掘り直しや重複の可能性がある4時期の変遷が確認された。このうちSD268 A期は、レンガや木杭、板材、角材が組み合わさった状態で出土しており、壁面の補強を行っていた可能性が考えられた。また、2・5・6トレンチの下層から河川堆積土と考えられる砂層が認められ、調査区のほぼ全域に河川跡が広がっていることが考えられる。遺物は、これまで長町駅東遺跡での出土例が少ない近世から近代にかけての陶磁器や瓦質土器が出土している。

仙台市文化財調査報告書第399集

長町駅東遺跡第12次調査

―仙台市あすと長町28街区・店舗建築工事に伴う発掘調査報告書―

2012年3月

発行　仙台市教育委員会
〒980-8671　宮城県仙台市青葉区二日町1番1号
TEL022-214-8839（文化財課）

印刷　株式会社　仙台紙工印刷
〒983-0036　宮城県仙台市宮城野区苦竹3丁目1-14
TEL022-231-2245